

て読んだ。その場の野次と自身のこころの方位の重ね合わせ。

きみという塊かたまりまだらに切り刻む初夏の木漏れ日まぶしいナイフ
吉野美野里

公園のベンチのような場所を思うとイメージしやすい。ふつう「木漏れ日」というと柔らかさを連想するが、ここは、きらきらきらめく切っ先の鋭い光。「きみ」の新しい一面を知った、の意味を読んではいいだろう。

生き物と思つてゐない幼子はオレンジ色のヒトデであそぶ
辻尾修

生きたヒトデで遊ぶ小さな子。ヒトデが生きているとはまったく考えていない幼子。逆にいえば、情報化されている私たちは、ヒトデが生きていると知識として知っているのので、幼子のように裸の心でヒトデと向かい合うことができな。ちょうど鏡のように、読者はふと自分の姿を見てしまう一首。

メッセージひらけば添付ファイルあり富士のみ山の青々と朝
山本枝里子

メールに添付されていた写真を開いたときの、意外な驚きを読んでいいだろう。何が添付されているか知らなかったので、いつそう驚いたのである。下旬、「青々と朝」という簡潔な表現がなかなかいい。

山茶花の大樹の姿整へて威勢よろしき門構へとなる
西山悌三郎

樹齢百年以上の山茶花の大木を見たことがある。堂々たる大樹だった。「威勢よろしき」が、大きさと大樹の

風格・雰囲気伝えてる。

物心はくまなく洗ひ清むべし明日は橘樹たちばな神社例祭

原尚美

お祭りを迎える心の準備をうたった歌だが、切れのいいリズムが魅力的な一首。とくに下旬、神社の名前を入れてびたりと着地を決めた感じ。神社の例祭で獅子舞を奉納、作者はそこで笛を吹いたらしい。

いちりんの雄花を摘んで葉の陰の雌花に付けるごめんなさいよ
中村由美

結句、ユーモラスな口ぶりがうまくおさまっている。子供のころ、庭に植えたスイカやカボチャの雄花の花粉を雌花につけたりしたのを思い出した。言われてみると余計なこと、お節介なことをしたのかもしれない。たくさん実をならせたい人間の都合で受粉するわけである。受粉作業は蜂など虫たちに任せておくのが、自然の姿なのである。

濁流は狭き水路に押し寄せて頑張れる葦を根こそぎ
流す
桑野智章

台風あるいは集中豪雨の歌だろうが、場面を小さく絞り、狭い範囲をきっちり表現して、輪郭のすっきりした一首に仕上げた。